2

戸塚悦朗氏との遭遇と対話

藤木　俊一

宗教系大学の講師と会話

２０１４年７月14日よりジュネーブの国連自由権規約委員会のメインセッションに、慰安婦の真実国民運動「国連調査団」（後の国連派遣団）のメンバーとして参加した。

会場には、日弁連ＮＧＯの団長であり、福島瑞穂参議院議員の事実上の夫（夫婦別姓を推進しているために入籍していない）である海渡雄一氏も来ていた。

また、慰安婦を「性奴隷」と国連で呼び変えたことで有名な戸塚悦朗弁護士も参加していた。

戸塚氏とともに、某宗教団体の名前が背中に大きくプリントされた法被（はっぴ）を着た40歳代と見られる男性が、常に行動を共にしていた。

私はこの宗教関係者がどのような目的で、この自由権規約委員会に参加しているのかに興味を持ったので、彼が戸塚氏と離れた隙に彼に話しかけてみた。名刺交換をして、彼がこの宗教団体の経営する大学の講師であることを知った。そこで、次のように問うてみた。

「あなたは宗教関係者であるということは、一方的な意見のみを鵜呑みにするようなことはしませんよね？　戸塚先生の行っていることが正しいと思って参加されているのですか？」

ここで、わざわざ「宗教関係者」という限定的なことを出すことにより、いい加減な返答をされないように一応、警戒しておいた。

とても物腰柔らかで、常に険しい顔をしている左翼とは違う雰囲気だった。好印象をもった。

彼の私への返答は、「私は20年前から戸塚先生について国連に通っています。戸塚先生に慰安婦問題でさまざま教えてもらって来たので、反対側の意見の存在自体を知らなかった」と、そつのないものだった。

私は、マスコミでも取り上げられているのに知らない訳はないと思ったものの、20年間も戸塚氏と行動をともにしていれば、さもありなんと思ったので、それ以上、彼を問い詰めることはしなかった。私たちは、慰安婦の強制連行などなかったと言う立場で国連に来ていることを

説明し、その理由も簡単に説明した。

国連に3日間いる間に彼と顔を会わせる際には、声をかけるように心がけた。ほぼ3日間、毎日、顔を会わせたので、その都度、彼と短い会話を交わした。宗教関係者であれば、無視することは出来ないだろうと考えたからだ。

最終日の全ての会合が終わり、左派NGOがロビーで記者会見をしている最中に私と論破プロジェクトの藤井実彦氏が近くを歩いている時に彼とすれ違ったので、感想を聞こうと話しかけてみた。毎日会話をしてきたので、お互いにすんなり立ち止まって話を始めた。

ちょうど、日本政府が「慰安婦を性奴隷と呼ぶのは相応しくない」と本会議で回答した後だったために、その感想を聞いてみたかったのだ。彼は、率直に驚いていた様子だった。そこでまた、彼に対して私たちの意見を説明しながら意見交換を行った。

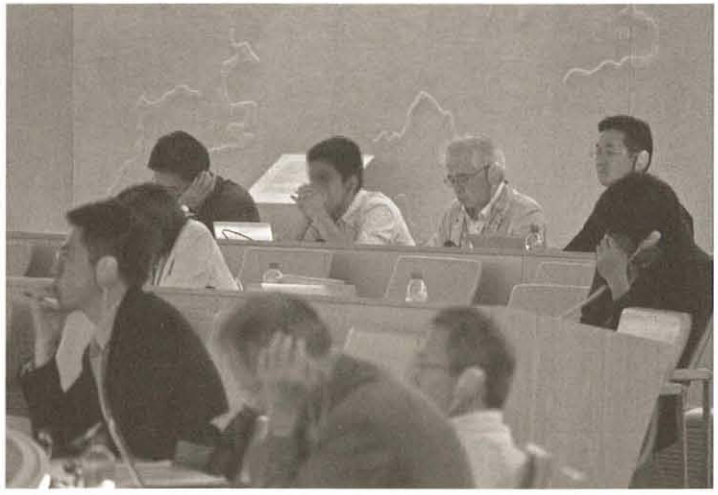
2日間、会話を続けてきていたので、お互いにまったく敵意はなく、普通の立ち話ができた。そこにたまたま戸塚悦朗氏のご子息が通りかかったので、彼がそのご子息を我々に紹介してくれた。こうして、戸塚弁護士父子との出会いとなった。

「性奴隷」と言い換えて委員に注目され始める

戸塚氏のご子息というが、戸塚氏の年齢からすると非常に若い青年だった。米国の高校に通っているとのことだった。

私は、彼に彼の父親である戸塚悦朗氏の、慰安婦問題に関する主張について率直に質問してみた。彼の私への返答は「僕はまだ勉強中なので細かいことがわかりません。もう少し勉強したいと思っています」というものだった。

その返答も、きっちりとした教育を受けていることが容易に分かる丁寧な返答だった。また、その言葉の端々から、非常に素直で聡明であることもうかがえた。とてもあの邪悪なイメージを反対派からはもたれているかも知れない戸塚悦朗氏のご子息とは思えない好印象だった。



ジュネーブ、自由権規約委員会を傍聴する戸塚悦朗氏（上の段、左から3番目）。

私と藤井氏、宗教関係者と戸塚氏のご子息の４人で立ち話をしていたところに戸塚氏が通りかかった。はじめは一旦通り過ぎたものの、我々のところに戻ってきて「君たちは誰だ？」と強めの口調で話しかけてきた。

そこで、自己紹介をして、それまでに話していたこと、ご子息が非常に素晴らしい、将来有望な青年であると私なりに感じたことを述べた。息子のことを褒められた戸塚氏は、普通の父親の顔をみせ、そこからスムーズに会話をすることができた。

戸塚氏に対して、当初勝手に抱いていたイメージとは全く違い、物腰の柔らかい普通のおじさんという感じだった。そこで、戸塚氏の考えを聞き出そうと、慰安婦問題に関して質問をしてみた。その時の会話の中心のみを振り返ってみることにしよう。

藤木「戸塚先生、なぜ慰安婦を性奴隷と言い換えたのですか？」

戸塚氏「私の勘だよ！　勘！」

藤木「勘だけですか？」

戸塚氏「そうだよ。すごいだろ？　私は34年間国連に通い続け、20以上の日本が犯した人権侵害の問題を議案として提出しここで発言してきたが、どれひとつ取り上げられなかった。しかし、私が１９９２年に慰安婦を性奴隷と言い換えたことで、国連の委員たちが私の言うことに注目するようになったんだ。だからすごいんだよ。」

さらに話を聞こうと、あえて反論することはせずに続きを聞いた。しかし、慰安婦問題から何度も話をそらそうと試みる戸塚氏に、何度も、慰安婦問題に話を戻すように促さなければならないほど、戸塚氏は慰安婦問題から話を変えようとしていた。

藤木「先生、こんなことをしていて楽しいですか？」

戸塚氏「楽しくないよ」

藤木「何故ですか？」

戸塚氏「あなたたちみたいなのが出てきたからね」

これが、戸塚氏の本音なのかもしれない。従来は、自分たちが国連に言ってきたことは、何の疑いも妨害もなくそのまま通ってきた訳だからこの返答は当然と言えば当然だろう。

彼は、慰安婦問題からしきりに「第一選択議定書」に話を持って行こうと試みていた。

戸塚氏は、「私が一番初めに国連に来たのは１９８４年で、その時は精神病院問題だったんだ。自由権規約の第一選択議定書を批准しろと言いに来たんだ」と説明を始めた。

「第一選択議定書」とは、現状では日本国での最終司法決定機関は最高裁判所であるが、日本政府がこの第一選択議定書を批准すれば、人権に関して最高裁が判決を出しても、個人が国連に対してさらに救済を求めることができる「個人通報制度」のことだ。

これが意味することは、日本において最終審であるはずの最高裁判所の上に国連の決定がなされることとなり、日本の国家としての根幹を揺るがすことになる。現在まで、日本政府はこれに批准していない。当然であるが、今後、どうなるかはわからないので、国民がしっかりと監視することが必要だろう。

■思想の背骨は戦勝国史観

戸塚氏らと20分ほど立ち話をしていると、戸塚氏よりコーヒーでも飲もうと誘われ、国連内のカフェテリアで、戸塚氏に紙コップに入ったコーヒーをご馳走になった。また、一緒に写真撮影もしたが、戸塚氏より、一緒の写真は「外に出るとまずいので、ネットなどに絶対に出さないで欲しい」と言われたので、公開はしていない。

そこから約1時間、さまざまな事柄に関して意見交換をしたが、戸塚氏はさすがに左翼らしく一方的な議論と論点ずらしを仕掛けてきた。そして、私たちに言葉を挟む間を与えないように主張し始めた。

しかし、私たちも論点ずらしをする左翼とは、さまざまな場面でやり合ってきているので、論点をずらされたら戻すということを何度も繰り返した。戸塚氏も、かなりやりにくそうであった。

戸塚氏の物腰は柔らかく、高圧的な態度はまったくといってよいほどなかった。普通の会話をすれば、話し好きの良い人なんだろうなと感じた。

吉見義明中央大学教授に関しても聞いてみた。

藤木「吉見義明教授の言われていることは100%正しいのですか?」

戸塚氏「非常に正確だね。資料に基づいて

香港フェニックステレビの取材に応じる藤木俊一氏。

きちんと検証しておられるからね」

しかし、またすぐに論点ずらしが始まった。

戸塚氏「国連は日本叩きをする機関だと書いている人もいるけど、そうじゃなくて、ここのものすごく重要な構成要員は日本なんですよ。アメリカが一番払ってて、次は日本なんですよ」

藤木「しかし、日本は敵国条項に入っていますよね？」

戸塚氏「だって、当然じゃない。日本やドイツやイタリアを…」

藤木「抑え付けるための国連ですね」

戸塚氏「そうそう。人権擁護ができるようにするってのが、戦争目的だから。戦争目的は1942年の1月1日の連合国宣言の時に決めたのよ。日本やドイツやイタリアが人権に関してきっちりするまでは、戦争をする。そのための組織を作るってことだからね。日本やドイツやイタリアが暴れると世界平和がなくなるから」

藤木「そうであれば、戸塚先生は連合国軍の正義を認めていると言うことですね？」

戸塚氏「そうだね。当たり前じゃない。僕は人権の方が好きだもん」

藤木「好き嫌いの問題なんですか？」

戸塚氏「性に合うんだよ」

藤木「なるほど」

このように、彼の活動の根幹にあるのは、問題そのものの解決ではなく、個人的な好き嫌いのようだ。さらに完全に戦勝国史観が染みついていることが明確に理解できた。

戸塚氏「1940年に日本は何を言ったかというと、日本がアジアを支配するって言ったんだよ。それでイタリアとドイツがヨーロッパを支配すると言ったわけよ。一つの民族がその他の全ての国を支配するなんていうのは、だいたい考えること自体がおかしい。それに対抗してUnited Nationsができたんだから」

藤木「アジアの国々も白人の奴隷政策の餌食でしたよね？　白人の奴隷政策は良くて日本はダメだったんですか？」

戸塚氏「悪いですよ、そんなもん」

藤木「悪いですよね。奴隷政策を止めろと言ったのは日本だけですよ」

戸塚氏「そんな事ないよ。国家よりも奴隷制度を廃止する運動をしている人が大事なんだよ。私はルーズベルトが初めてヒューマンライツって言葉を国際社会に出したのが良いねと思った

んだよ。それが、1945年の1月1日なの。それまで「ヒューマンライツ」（人権）って言葉は国際文書にないんですよ」

このように、何が何でも日本は悪だが、白人様の言うことは有り難く聞くといった姿勢であることが理解できた。完全に日本の戦後教育の犠牲者である。それも優秀であったためにその分、重篤である。

「日本の男女差別は病気」

藤木「ヒューマンライツとは違いますが、1950年代まで多くの西洋社会では、女性が旦那の許可無く銀行口座を単独で作ることすらできなかったんですよ。日本はその当時から売春婦ですら自由に口座を持つことが出来たんですよ。そのような男女差別が日本にはありますか？」

戸塚氏「ありますよ」

藤木「西洋にあったような差別がありましたか？」

戸塚氏「西洋と同じかどうかわからない。違うかもしれないけど。男女差別は明らかにあり

ますよ。憲法に平等だって書いてあれば、平等になったって私はそう思ったの。これで男女差別はなくなったってね。ところがね、どうしてなのか分からないんだけど、女性は国会議員になれないんだよね。日本がジェンダー指数を見てみると世界で百何位なんだよ」

藤木「私は、それで良いと思いますよ」

戸塚氏「その大きな原因は、やっぱり国会議員の数なんだよ。アメリカは憲法で女性の人権を認めてないんだよ。男女平等って規定はないんですよ。だから毎年毎年、アメリカの女性は平等にするようにと国連に訴えてるんですよ」

藤木「もちろんそうでしょう。実際に差別があるわけですからね。差別がなければそんな必要すらないでしょう」

戸塚氏「差別のあるなしではなく、憲法上の保証がないからなんだよ」

藤木「憲法って法律ですから、差別がなかったら法律も必要ないんですよ」

戸塚氏「そりゃそうだけどさぁ…。日本には男女平等の法律があったって差別があるんだよ」

藤木「例えばどういう差別ですか？」

戸塚氏「だから、言ってるじゃない。国会議員は何で女性がなれないかね」

藤木「ごめんなさい。国会議員はなれないなれるではなく、あくまで選挙の結果だけですよね」

戸塚氏「そうだったらね、女性は女性にしか投票できないってすればなると思うんだけどね。

ただ、それは制度の問題だからね。事実の問題を言ってるのよ」

「男女共同参画」を取り入れたのが日本の大きな汚点となっているようだ。これは、前述のように明らかな女性差別がある国が作ったものであり、文化も、歴史も、状況も全く違う日本に取り入れたことで、無かった問題を作り出し、政府批判の材料にされてしまっている。リベラルは、ある部分だけを切り取り、「フランスでは成功した。ドイツでも成功した。よって我が国でも取り入れるべきだ」といった日本の伝統や文化を完全に無視したこれらの西洋かぶれが、問題の発端であることは明らかだ。

要するに井の中の蛙なわけだ。日本の素晴らしさや文化、伝統を学んでいないために、西洋の制度との互換性などには目が全く向いていないということだ。

藤木「日本は、太古の昔から自然災害が多いから、男性も女性もそれなりの役割を果たしてこないと存続できないため、『差別』ではなく『区別』していたんですよ。差別があったとは、私は思っていないですよ」

戸塚氏「戦前九州大学に女性が入りたいって話があったんだ。九州大学がそれを検討したんだ。それで、誰に聞いたかっていうと、美濃部達吉って人知ってる？　天皇機関説事件ってので、

軍に辞めさせられた人ですよ。東大教授だよ。その人は、自由主義者として知られていた人だよ。女性を法学部に入れるってのはどうでしょう、と相談されたんだよ。それで、私は、『ＩＬＯとジェンダー』という本を書いたんですよ」

■「性奴隷」への反発は初期の病人の「拒否反応」

戸塚氏「性奴隷ってのを男がここに来て言うのはおかしいでしょ。男女差別があるからだよ」

藤木「先生は、ＧＨＱの自虐史観に染まってないですか？」

戸塚氏「ロスって人が書いた『死ぬ瞬間』って本読んだことある？　貴方は癌ですと言われると最初に反応するのは、拒否反応なんです」

藤木「癌じゃないってことですか？」

戸塚氏「癌じゃないってね。次は怒り出すんだよ。そしてだんだん受け入れてくるんだけど、そのプロセスに法則性があるんですよ。だから、私が思うにはね、日本が病気だと言われたら『病気じゃない。けしからん。』というのが、最初の反応なんだよ。だからね、日本人が『慰安婦は性奴隷だ』と言われたらものすごく自然な反応だと思うの。だけどね、だんだんに受け入れていくプロセスがあるから、そのプロセスを踏んで欲しいんだよね。だから、日本は病気なんだよ。

日本は病気なんだから」

藤木「先生自身は病気じゃないんですか？　先生が病気じゃなくて日本が病気なんですね？」

戸塚氏「私だって病気ですよ」

藤木「病気の人が病気の人に病気って言ったって説得力ないじゃないですか？」

戸塚氏「お互いに病人かも知れませんよ。日本が病気を指摘されたら、どこが病気なのかを研究して…」

藤木「日本ってそんなに馬鹿な国ですかね？」

戸塚氏「馬鹿じゃないが感情的な国だね」

藤木「日本は冷静な国ですよ。諸外国に比べたら、感情的じゃないですよ。韓国なんかに比べたらはるかに冷静ですよ」

世界標準から見た日本の位置を全く理解していないことが、これらの発言を聞いて非常に良く理解できた。

「性奴隷」の持ち込みを自慢する

戸塚氏「日本が国連にいくらお金を出してると思ってるの？　莫大な金を出しているんだよ。国連は日本の物なんだよ。ただ、日本の病気を治してくれるところなんですよ。病院みたいなもんだよ。病院に来て病気だと言われたら、そうか、病気かも知れないなと、じゃ、ちょっとそれを治しましょと言ってね」

藤木「そしたらそこにＬＧＢＴや公営住宅問題なんかが出てくるわけですか？　言っている方が病気ですよ」

ここでも、反論に困り、またも論点をずらす。

戸塚氏「第一選択議定書は裁判じゃないけど裁判みたいなものなんだよ。公正な手続きに則って国連で話し合って直せば良いじゃないか」

藤木「でも、強制力はないですよね？」

戸塚氏「病気なんだから、病気だって言われたら素直に手術を受けるとかね」

藤木「日本は病気だってことなんですね」

戸塚氏「病気のところがあるってことだよ。アメリカだってイギリスだって病気はある。病気であるってことをここで秘密で指摘して貰うんだよ。一つ一つの病気をピンポイントで治せる

んだよ。私が最初に性奴隷って行ったところは人権委員会って大きなところだったんだよ。それで、世界中に広がったんだよ」

藤木「先生は結構余計なことをしましたね」

戸塚弁護士は、自分が国連で「性奴隷」という言葉を持ち込んだことを自慢している。

戸塚氏「だから、あなた方も第一選択議定書を早く批准しなさいって言わなきゃならないんだよ」

藤木「慰安婦問題と第一選択議定書に何の関係があるんですか?」

戸塚氏「何の関係もないよ」

藤木「じゃあ、今までの説明は全部無駄だったんですか?」

整合性のない話を延々と行い、さらに自分でも関係ないことを認めている。要するに話題をずらして、話をかわしていくというのが習い性になっているように思える。これは、左翼の人たちに共通する部分である。

戸塚氏「私は慰安婦の人たちからも委任状受けてるわけじゃないんだよ。誰にも頼まれてないんだよ」

藤木「先生は、敵国条項に入っている日本人として、ここ国連にいることについて居心地は良いですか?」

戸塚氏「今は、非常に居心地が良くないよ。何故だか分かる? みなさんがいるからよ。(笑)私の言うことを理解してもらえないから最近は居心地が悪いよ」

藤木「そこはね、きっちり公開討論会かなんかをやるべきでしょう」

ここでもわかるように、話を半分だけずらしていっているわけだ。「敵国条項にいまだ入っている日本人として国連に来ていて居心地が良いか?」との問いに対して、「皆さんがいるから居心地が悪い」と言う。回答になっていない。居心地が良いかだけを問うたのであれば、「居心地が悪い」ですむが、敵国条項の話をこちらが意図的に入れても、それに対する返答はない。

■荒船清十郎の講演録から「20万人」を言い出す

藤木「最後に聞かせて下さい。20万人の性奴隷って本当ですか?」

戸塚氏「20万人説は、僕のデータじゃないの。でも、私は相当根拠があるんじゃないかと思うよ。最初に20万って数字を出したのは私なのよ」

藤木「先生が20万人って出したんですか？」

戸塚氏「そうそう。なぜだか分かる？　根拠としては、当時ね、私の入手した講演録があるの。誰の講演録かって言うとね、衆議院の副議長やってた荒船清十郎がね、日韓条約が出来たときに講演したんだよ。その時に14万2千人だったかな。何百人まであったかもしれない」

藤木「それは性奴隷ですか？」

戸塚氏「性奴隷じゃないよ。14万2千人だったかの韓国人の女性を日本軍がヤリ殺したんだと」

藤木「14万人をヤリ殺した？」

戸塚氏「それは殺しちゃった数だよ。それなのにこれくらいの金額で、安いじゃないかと言ったんだよ。その当時の軍の数から考えたら8万人は必要なの。合計すると最低20万人になるんですよ。だから、私は20万以上だろうと」

藤木「それが20万人の性奴隷説の始まりですね」

戸塚氏「うん」

ここで、20万人説は自分のデータではないと言い根拠もはっきりしないままに、自分が数字

を出したことを説明している。要するに、日本たたきができれば数字はどうでも良いということのようだ。

藤木「だったら、その20万人が性奴隷にされるときにその女性たちの家族は何してたんですか？」

戸塚氏「わからないよ。僕はわからないよ。ところがね、慰安婦の人たちの名簿があるのよ」

藤木「どこにあるんですか？」

戸塚氏「軍が持っていたんだよ。渡航のための資料もあるんだよ。これは、内務省にある。内務省の地下にある。これをね、出させなきゃならないんだよ。ところがね、これを出さないでしょ。20万がおかしいってんなら、たちどころにそこに行って調べてみればいいんですよ」

藤木「性奴隷が20万人ですかって話をしてるんですよ？」

戸塚氏「それじゃね、19万4千人の内の性奴隷が80万人ですとか」

藤木「増えちゃだめでしょ」

戸塚氏「例えば8万人とかね。それは、私がやる仕事じゃないのよ。私は推定しただけ」

藤木「それじゃ、僕も推定して良いですか？」

戸塚氏「いいよ」

藤木「例えば慰安婦は3万人だったとか」

戸塚氏「根拠が言えればいいんだよ。私は根拠を言えるからね。日本政府がちゃんと調査して3万人でしたとか言えばいいんですよ。言わないからこうなったのよ」

根拠を説明しないままに自分には根拠があると言う。全く意味不明な説明である。

戸塚氏「だから、私は日本政府に重大な人権侵害を毎年1個ここにもって来なければなりませんねって言ったんですよ。そしたら、政府がどうぞって言ったんですよ。だから、日本政府に僕がそう言われたら、引っ込むに引っ込めないじゃない。お金もかかるし時間もかかるしね。2〜3年やれば政府が降参するかと思ったのよ。それでね、色々やったの。「代用監獄」も持ってきたし、「死刑再審」も持ってきたし。一番大きかったのは「過労死」ってのがあるんですよ。勝手に出来ないから、過労死弁護団にきっちり挨拶をして、それで一緒にここに来て、やったのよ。2年くらいやったら、労働省が良くなったんだと。労働省の役人がその時だけは否定しなかったのよ。黙ってた。なんでって言ったら、私たちが過労死するって言ってたよ」

このように自分のやってきたことに話題を変え、自分のフィールドでしか話をしない姿勢を

いっそう強めている。

■慰安婦に「強制」された米兵の話

藤木「慰安婦問題に戻しましょう」

戸塚氏「国会議員の人からね、こんな慰安婦問題があるって言われたんだけどね、国内法上難しいし、被害者がいないんだよね。何も出来ないですねってね」

藤木「被害者はいないですよね」

戸塚氏「そしたらさ、被害者が出てきたんだよ。日本政府はね、あれは業者がやって、日本軍の後を追っかけてきたって言ったんだよ。だから調査できないってね。そこが間違いなんですよ。調査すれば良いのにさ」

藤木「私はね、朝鮮戦争の時に従軍していた（アメリカの）軍人数人に聞いたのですが、『強制があった』って言うんですよ。ただ、その強制はね、軍人が基地から出るとそこに多くの慰安婦が集まってきて、強制的に客にさせられたってね。先生はこれをどう見ますか？」

戸塚氏「それはあったかも知れませんね。そういうのも、問題にしなきゃ。あなたがそういう人たちの人権を守るために行動したら良いんですよ。そうでしょ？」

軍人たちが客になれと女性たちに強制されていたことを言っているのに、どこまでも話はかみ合わない。

藤木「どういう人たちの人権をですか？」

戸塚氏「あなたの言う助けを求めている人だよ」

藤木「助けなんか誰も求めてないですよ。軍人に売春婦の客になれって詰め寄って来てたって話ですよ。女性が売春させろって、集まってきてるって意味ですよ。このジュネーブの街の中にも売春婦が大勢いるじゃないですか」

戸塚氏「それはある。そういうのもある。だけど、日本軍の慰安婦制度ってのは違うね」

藤木「性病やレイプを防ぐためのものでしたね」

明確な違いを一切示さないままに「日本軍の慰安婦制度は違う」と断言される。日本軍をどうしても悪者にしたいという意思が明確に表れていた。

戸塚氏「私が言ったと言うよりもやっぱり、時代の要請でしょう」

藤木「時代の要請じゃなく朝鮮人が金になると思っただけでしょう」

戸塚氏「要するにね、これまで女性は言えなかったんだって。ものすごいいっぱい問題があるってことがわかってきたわけ。戦時の女性のね、人権のね。それで、その戦時の女性の人権侵害がここで問題になったのよ。だから、僕の本をまず読んで下さいよ。『日本人の知らない戦争責任』ってのがあるから。そこにその経過を書いているのよ。あなたたちは、早く日本政府を説得して第一選択議定書を批准するように言うのよ。僕は、日本政府が批准したらもう、ここに来ないよ」

自分が率先して行ったことを追及されると、「時代の要請」と責任を逃れる。しかし、慰安婦を性奴隷と言い換えたことは、成功だと思われているらしい。

■「性奴隷」かどうかは訴訟で決めよ

藤木「しかし、性奴隷は違うでしょ？」

戸塚氏「性奴隷は性奴隷なんだからあきらめなさいよ。訴訟やったらよいじゃないよ。国際司法裁判所に訴えればよいじゃない。できるんだからさ。手続きも教えてあげてるのにさ。国

際的な機関に1人1人が訴え出て、『貴女は性奴隷』『貴女は性奴隷じゃない』って判断して貰うのよ。そういうことで、解決したらどうかと日本政府にちゃんと言ったのよ。被害者の方もそれに応じたから。ところが、日本政府は拒否したんだよ。わかる?」

藤木「その時は、誰が拒否したんですか?」

戸塚氏「日本政府がだよ。ここに来る外務省のあの人たちや外政審議室なんかがね。裁判でやるべきなんだよ。あなたが言っている兵隊よりずっと儲けていたって人は認められないですよ。騙されて慰安婦になった人を認めるわけ」

藤木「騙された、騙されてないってのもわかりませんよね? 親に騙された人もいるだろうし」

戸塚氏「それは、調べればある程度はわかるはずだよ。だけどさ、そういう手続きすら拒否したんだよ。日本政府が逃げ回るだけだからどうしようもないんだよ。合理的な制度、裁判、そういうことで解決しなさいって言うと嫌がっちゃうわけよ」

逃げ回っているのは、日本政府であり、性奴隷説を流布した自分ではないと言いたそうだった。この矛盾や、自己に都合のよい二重基準を広く知らしめるために公開討論会を申し込もうと考えた。

藤木「できれば、公開討論をやらして下さいよ。先生の知識もみんなにオープンにして貰って。本読めじゃ無理な場合が多いし、読まないですよ」

戸塚氏「だったら、もっと易しい本を書くよ」

藤木「この様な言葉のやりとりがあれば、先生の意見だって納得する人もいると思いますよ」

戸塚氏「あんまり希望を持ってないんだよ。ここに来てワイワイ言う気はないんだよ。でも、日本政府がやめないんだよ」

藤木「先生がやめないからじゃないんですか? 先生がやめれば日本政府もやめますよ」

そもそも、慰安婦問題を国連に持ち込んだのは、戸塚氏であり、それに日本政府は対応してきているだけであるが、戸塚氏から見れば、日本政府がやめないと考えているようだ。どうしたら、この様に自己都合だけの議論ができるのであろうか。

戸塚氏「日本政府は第一選択議定書を拒否する理由がないんだから。だから、私はやらされてるの。嫌なんだよここに来るのは。お金かかるし時間かかるし。慰安婦問題で性奴隷であるのか無いのかの意見の違いはあるでしょ。それを解決するのは、国際司法裁判所。日本を良くするためにやってるんだよ」

藤井「先生が人権に関して一生懸命なことはわかりました。韓国や在日と一緒になってやっているイメージがあったので」
戸塚氏「韓国なんかからはやめろって言われてるんだよ」
藤井「何でですか？」
戸塚氏「日本が良くなっちゃうからね。日本を永久に責め続けたいと言ってるからね。だから、慰安婦問題も解決してはならないってね。慰安婦問題で日本政府が謝るのは困ると」
藤木「そんな人がいるんですか？」
戸塚氏「中にはいるんだよ。それが困る。僕はそれは良くないんじゃないかと」
藤木「お金取れるからでしょう？」
戸塚氏「そうじゃない。やっぱり、日本が憎いんだよ。憎いのはね、歴史を調べたら分かるよ。だからあなた達がとにかく第一選択議定書を批准しろと。慰安婦問題が性奴隷かどうかってのはね、ここに来てわかったけど、そんな簡単にひっくり返らないから、裁判しろと」

慰安婦が性奴隷であると言った自分の意見は簡単には覆らないと自信たっぷりの様子だった。そして、あたかも韓国人の総意であるかのように「日本が憎いんだよ」とのこと。
私は、１９８７年より韓国へは、１００回以上の渡航経験がある。当時の韓国は現在のような反日ではなかった。一部の老人に反日感情があるとは聞いていたものの、反日的な言動すら聞く事はなかった。この経験から言えば、反日感情は１９８８年のオリンピック以降くらいから意図的に作られたのではないかと思う。韓国は民主主義国家といえども、休戦状態の国である。そして、北朝鮮からの工作員も多く潜んでいる。韓国と北朝鮮の国境の地下には、常に北朝鮮側から掘られる多くのトンネルが見つかる。

藤井「誰が誰に対して裁判するんですか？」
戸塚氏「日本政府が訴えるの」
藤木「政府は訴える必要がないですよ」
戸塚氏「だって、大使館の前のあの像はどうするの？　そこに性奴隷って書いてあるんだよ。それが次々に波及していくんでしょ？」
藤井「それは、先生の直感的な性奴隷って話が世界中に広がっているからでしょ？」
戸塚氏「それは、私のせいじゃなくて受け取った人たちがね」

ここでは、責任を「受け取った人」に転嫁している。とにかくスルスルと賢く身をかわしていると思っているのか、根っからそう信じ込んでいるのかわからないが、全く悪びれる様子も

なかった。

藤木「その受け取った人ってのが、白人の奴隷になった人たちってのは、僕らの感覚の性奴隷ってのと違うんですよ」

戸塚氏「だけどね、今日質問した人は白人じゃないよ」

藤木「南アフリカの人ですね。アパルトヘイトの被害を実際に受けた人ですからね」

戸塚氏「可哀想じゃないの」

藤木「自分たちが奴隷被害に遭った人たちですよ?」

戸塚氏「やっぱり可哀想とかじゃなくて、やっぱり国際法の問題だと思っているわけですよ」

藤木「まず、日本のことをしゃべる前に自分の国をどうにかしろよって僕なんかは思いますけどね」

戸塚氏「それは、やってるよ。やってるけども、そこが違うのよあなたは。あなたは日本が恥をかいているって思ってるんでしょう」

藤木「そうじゃないですよ。日本人は謝ることを悪としないですよ。悪いと思ったら謝りますよ」

戸塚氏「ほんと?」

藤木「本当ですよ。謝ったら、日本人はそれ以上追及しないでしょ?　1回謝ったら、もっと謝れ金よこせって言わないでしょ?」

戸塚氏「そうかな?」

藤木「そうですよ」

日本には、良くも悪くも「謝罪」の文化がある。レストランでウエイトレスを呼ぶときも、人に物を尋ねるときも「すみません」と言う言葉を使う。また、謝罪は時として勇気ある行動であるとされるのも、日本の文化である。一方、海外では謝罪は罪を認めたことにほかならない。

■「性奴隷」は戸塚氏の「主張」

戸塚氏「謝ってないんだよ、まだ。ちゃんとね。例えば、性奴隷を否定してるじゃん。それは、あなた達の言論の自由で、学問の自由だからいいんだけどさ。ここじゃなく、もっと高いレベルの国際司法裁判所の判断を仰ぐんだよ」

藤木「それも一つの方法でしょうね」

戸塚氏「なんで、これを安倍政権がやらないの?　野田政権が倒れちゃったからね」

藤木「慰安婦像を撤去しろといって国際司法裁判所に提訴して、撤去の命令が出たらそれでおしまいでしょ」

戸塚氏「その中で性奴隷かどうかってことが審議されるんだよ」

藤木「そんなことはないです。あそこにあれを置くこと自体がウィーン条約違反なんですから」

戸塚氏「そうじゃないのよ。あそこに書いてあることが問題なのよ」

藤木「先生はそう思われるかも知れないですが、ウィーン条約で大使館周辺に侮辱するようなものを建ててはならないと決まってるじゃないですか」

戸塚氏「だからね、なんで裁判を避けるのかって僕は聞きたいのよ。法的な判断は裁判所しかないのよ。世界に裁判所があって、それだけ性奴隷じゃないって確信があるんだったら、そこで勝負すればいいじゃない」

藤木「例えばそれで大使館前の慰安婦像がなくなっても、他で続きますよ」

戸塚氏「性奴隷かどうかってのを国際司法裁判所が判断するんだから」

藤木「そんな事は判断しないでしょう」

戸塚氏「絶対するよ。性奴隷であるかというのは、事実ではなく法律なんだって。法律判断の問題ってのは、最後は裁判所でやらなきゃしょうがないんだから」

藤木「先生は仮説として、その性奴隷ってのを使われたんですよね？」

戸塚氏「仮説じゃなく私の主張よ。弁護士ってのはみんな主張があるのよ。裁判所が判断するのが客観的な判断。国連の判断ってのもある程度客観的な判断ですよ」

藤井「国連が慰安婦＝性奴隷と認めた理由はなんだと思われますか？」

戸塚氏「奴隷だからね」

藤井「奴隷って言葉に敏感に反応しただけじゃない？」

戸塚氏「様々な条約に違反してるから、国連が奴隷をとったの。国際法での奴隷は一つですよ」

ここで次の予定がありタイムアップ。

最後になって、慰安婦が性奴隷であっても、なくても、事実関係はどうでも良く、単なる

国連を舞台に反日活動を行っていた左翼勢力。わが者顔で座っている。

自分の主張だと言い始めた。そして、その主張を国際社会が選択したので、自分の主張は正しいと言う論法だ。

物腰は柔らかで、必ず同意を求める「ねっ！」「でしょう？」を多用する。そして、始終、私たちの発言を遮り、持論を展開するという戸塚氏の話しぶりは、結局「相手の意見を聞かずに自分の意見だけを述べる」というスタイルだった。そして、少しでもこちら側から質問をすると、論点をずらしながら回答を避けていく。そんなかみ合わない会話だったが、「性奴隷」という言葉の発案者のナマの話を聞けたことは、貴重な機会でもあった。

第四章

初めての委員会発言で国連に風穴を開ける

第2次派遣・ジュネーブ国連代表団（2015・7）

第２次派遣。ジュネーブ国連代表団（2015.7）のメンバー。